

巻 頭 言

現在わが国でも着実に地歩を固めつつある学習者主体の教育論が、その源流のひとつをルソーの『エミール』に見出せるという事実については、ここであえて論じる必要もない。ただ、この矛盾に満ちた思想家の教育論を今もう一度読み直すとき、そこには子どもの本性への信頼と表裏一体のものとして、文明社会に対する痛烈な批判精神と、ますます変転きわまりない文明社会の中で人間が生きなければならないという冷厳な現実認識とが存在していたことを、あらためて省みるべきかもしれない。

そのように考えるのは、グローバル化がもたらす国際社会のいっそう緊密な結合と、自由な個人同士の開かれた関係の拡大とが、まさにそのグローバル化を加速させてきた諸国家を起点とする逆風に直面するという、皮肉な状況を目の当たりにしているためでもある。やはりルソーを源流とする新教育運動は、じつのところ今日の学校改革を1世紀先取りしたものであるわけだが、この世界的運動が主体的学習者としての子どもを中心とする学校教育への転換を促し、そのことを通じてより人間的な社会の実現を目指した時代のわずかな後、これらの自由への努力がどのような抑圧に呻吟したかを歴史は記している。

しかし、これは「歴史は繰り返す」という安易な悲観に逃げ込むための言い訳ではない。むしろ過去を捉えつつ未来を見据えて、人間とはいかにあるべきか、人間が人間として学び育つとはどのようなことか、そしてそれはどのように実現しうるかを、真摯に探究していくことがいっそう求められているのだと考える。

その意味で、『学習開発学研究』がここに第10号を迎えることは、一つの節目であるとともに弛みない継続の一部である。そしてまた、井上先生が昨年度記されたとおり、今年度は制度的改革を機に新たな一步を踏み出す時でもある。教職大学院を担う教職開発講座へ移られた先生方、また博士課程前期の学習開発学専攻を構成する初等カリキュラム開発専修ならびに特別支援教育学専修の先生方、さらには博士課程後期を一つに統合した教育学習科学専攻を構成する教育学研究科の先生方との日々の交流のもと、学びをめぐる複雑な諸問題に理論・実践の両面から取り込んでいくため、本紀要のいっそうの充実を図っていく所存である。その一環として、今号より研究論文以外の投稿も広く受け付け掲載することとした。皆様の研究交流の場として役立てていただければと願っている。

本研究紀要ならびに編集主体の学習開発学講座の発展には、多くの方々のお力添えが必要である。今回の試みへのご意見ご批判を含め、今後ともご指導を賜れば幸いである。

平成29年3月

広島大学大学院教育学研究科
学習開発学講座主任
編集委員長 山内 規嗣